

暫時は己がじゝ繪の補綴などして、いよゝゝ交換繪葉書製造にかゝりぬ。第一にこゝの判を押してよと頼めば、種々の形のもの、終には烙印に朱肉して押したるまでありける。愈ゝこれを利用して繪とすれば、漸々に寄書してなかくゝに興あるもの得出来ぬ。先に隣席にありける、とぼけ面の鼻鹿二人、大變だゝと入來り、何卒拜見さして破〇

下といふなりけり。いやこれは面白い。な、なる程、おつてげすな。これを一枚頂戴い出来ませうまいか。あげても可いが、一席やり給へ、何れ技術の交換だ。いやそれは痛入りました、御尤様で。時しも用紙の真中に角印を菱形に押したるを、小林子髯面の坊主が大口開きし體に描きければいやこれは面白い。そこへ汀鶯子、扇子をもて額を打たんとする様に書添へける。

いやすぐあゝやられる、恐入りしましたな。かくて繪を乞はん白扇だに持たざる彼等は、とんだ御邪魔様をと、元の座敷へと引下りぬ。二人共に何れは御ひいき様の取巻きとはいはせてもの事なるべし。これよそれよと描きゝてこゝに三十餘枚。中にも傑作とすべきは、淺草觀音、元録の面影ハイカラ、晚歸、百花園等なりき。折しも取寄せし言問の



蒸菓子來りぬ。今日は案外にも甘黨の跋扈。上ごのわれの殆ど閉口、口惜しさに二ツ許を亡しぬ。小林子とある菓子笠と見立て、畫紙に載せ、雀躍りを描きたる、面白さに宿の主に贈りつ。やがて夕日の西に傾げば、興は盡きれどこゝを立出て、小松島の畔に行き、隅田の堤の森淡きわたり、前景に船二三艘

これにても知らるべくなん。

ある處に、六人づらりと三脚を並べぬ。こゝに到りて三脚持たぬわれの悲しき、地上に布呂敷布きて箱を開ける様の、宛らに雪踏直しの格なるも可笑しかり。繪筆を走らすこと三四十分、繪のあらましに仕上がれる頃は手元やゝ暗くなりければ、まづは寫生箱を閉じて家路へと向ひぬ。汽船中にて、華秋子の曰く、あんな催しならばいつでもお知らせください。どんな都合にしても參ります。今日の會合の什麼に興深かゝりしやは、

(完)

さらゝと運動かす池の龜
涼風やあちら向きたる亂れ髪

鬼貫 同